Bulletin　（第3種郵便物認可）　鉄鋼　（4）

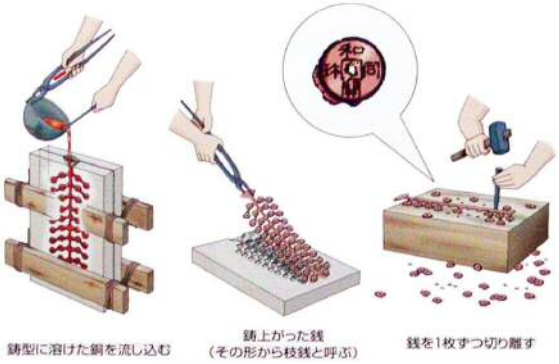
鉄のふしぎ？博物館 ■38

『寛永通寶』四角い穴

衣川製鎖工業・衣川良介社長

見学に来た小学生が展示されている『寛永通寶』を見ながら私に質問をしました。「おっちゃん、昔のお金、四角い穴が開いているね。僕らが使う5円玉や50円玉は丸い穴、どうして違うの？」私「今、使っている1円玉から500円玉などの硬貨は、薄い板からパチンパチンとたくさん一緒に切り抜いて作っています。丸い穴は得意ですが、四角はむずかしいのです」（専門用語では打ち抜きと言います）「昔のお金『寛永通寶』などは母銭（ぼせん）と言われる元型を使って、砂に形を作り溶かした青銅や真鍮を流し込みました。ですから穴は丸でも四角でも出来たわけですが『寛永通寶』には四角い穴がありません。これは穿（せん）と呼び、仕上げ工程でこの孔に四角い棒を入れろくろを使って、外周を削ります」（金属を溶かせて型に入れるのを鋳造と言います）

『寛永通寶』文銭（直径24・5ミリ、重量3・6グラム）



図②鋳込み→ばらし

その工程を簡単に説明します。

①地金の配合②地金の溶解③鋳型の作成④鋳込⑤型ばらし⑥選別⑦仕上げ

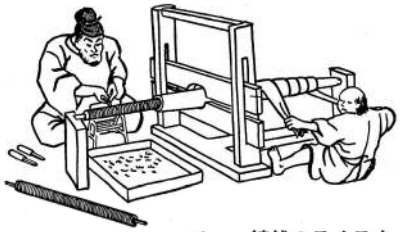
鋳込みから仕上げまでの工程は添付の図2と図3を参照してください。

我が国で初めて本格的な通用銭が作られたのは『和同開珎』（わどうかいちん、わどうかいほうとも読む）708年（和銅元年）です。この年慶雲5年、秩父で和銅（にぎあかがね）と読み、柔らかな自然銅が、朝廷に献上されたことを喜び和銅に改元しました。

初めて四角い孔をうがったのは紀元前220年ころ、秦の始皇帝です。通貨の統一を企て、円形方孔銭の形が生まれました。『和同開珎』を作る時お手本にしたのは中国、唐代の代表的通貨『開元通寶』で、西暦621年に発行され、遣唐使や遣隋使により日本へと持ち込まれた渡来銭です。書体などを見ると和同開珎と酷似しています。大きさは外径8分（約24ミリ）、重量1匁（約3・7グラム）。

私の持っているのは23・5ミリ、厚みが0・75ミリ、穴6・5ミリ、重さ2・0グラム。一匁の半分程度なので、私鋳銭ではないかと考えています。

日本では穴あきの5円玉を洗って「ご縁があります ように！」『福銭』などと言って神社で参拝者に配ったりします。世界的には穴あきコインは珍しいもので、私の手元にあるのは10円玉と同じくらいのオランダお金だけです。（1936年の年号が記載されています）。昔、東南アジアやアメリカにチェーンを輸出していたころ、海外出張の折には真新しい5円玉を多く持って行き「日本のラッキーコインです」とちょっとしたお礼に差し上げていました。その時「え、これ使えるコインですか？」こんな驚きの声を何度も耳にしました。



図③ろくろを用いた外径の仕上げ

鋳銭のろくろを用いた仕上げ
「貨幣の生いたち」より

【参考資料】
▽大阪歴史博物館　2005年11月展示より（図2）
▽貨幣の生いたち　造幣局朝日新聞社1940年（図3）

画像はカラーと交換しています。